

【教育心理部研究構想図】

全校研究主題

自走する子の育成

主題設定時の教育心理部の状況

1. 今日の課題から

- ・「生徒指導提要」から、発達支持的教育相談において意図的に学習活動と関連付けて実践することが求められている。
- ・次期学習指導要領の論点整理から、問題発見・解決能力が、各教科等の学習の過程で重視されることが求められている。

2. 目の前の子供の姿から

- ・仲間に積極的に関わろうとする児童生徒は多い反面、自分本位な関わりが多く、他者を配慮して関わるのが弱い。
- ・他者の細かい動きに気をとられ、指摘が多く、仲間の良さに目を向けにくい児童生徒がいる。

教育心理部の目指す姿

日常場面における諸問題に対して、解決するためにどうすればよいか考える過程で、他者の思いに気付き、自分の思いを伝えたり、他者と協働的に問題解決をしたりすることで、よりよい関係を築きながら生活しようとする姿。

教育心理部の研究主題

仲間との関わりから、他者の思いに気付き、自らよりよい関係を築いていこうとする児童生徒の育成

1年次の成果と課題

ステップ表やQ-U等を活用し、一人一人を捉えてきたが、より捉えやすく使いやすい客観的データの再考が必要。

自走に必要な資質・能力

発見力「社会的情報処理モデルのサイクルを促す力」

教育心理部の研究仮説

- ・9年間で育みたい資質・能力を明確にした指導計画に基づいて、児童生徒にとって必然性がある身近な問題場面を設定することで、他者を慮ろうとする意識をもち、よりよい関係を築いていこうとすることができるだろう。
- ・客観的データや教師の見取りに基づいた支援を充実させることで、児童生徒が自己理解を深め、他者の思いに気付けるような心情を育むことができるだろう。

教育心理部の研究内容

1. 9年間で育みたい資質・能力を明確にした指導計画の工夫

- ①9年間の見通しをもち、社会的情報処理モデルを基に育みたい資質・能力を整理する。
- ②育みたい資質・能力に合わせてSGEやSSTを効果的に位置付ける。

2. 自他の理解を促す学習環境の工夫

- ①課題を自分事として捉えられるような導入や問題場面を設定する。
- ②個々の見立てや関わりの手立て等を考えた教育心理部の研究成果を活かし、各教科の学びや他の教育活動に向かう力の基盤を養う。

3. 児童生徒一人一人の捉えや教師の見立ての工夫・吟味

- ①客観的データの活用やより効果的なステップ表の活用に向けた内容の整理・修正、活用方法の改善を行う。

仲間との関わりから、他者の思いに気づき、 自らよりよい関係を築いていこうとする児童生徒の育成

吉田侑矢

要約

教育心理部では、児童生徒一人一人が集団に位置付き、集団に適応できるようになることを目指している。全校研究主題「自走する子の育成」より教育心理部では、「自己や他者を理解しようとする姿」「問題に気づき、解決のための方法を見出すことができる姿」「よりよい関係を築こうとする姿」を自走する姿と捉え、「仲間との関わりから、他者の思いに気づき、自らよりよい関係を築いていこうとする児童生徒の育成」を主題とした。その姿に迫るために、「9年間の指導計画の工夫」「学習環境の工夫」「児童生徒の心情面に寄り添った見立ての工夫」の視点から、実践を進めている。これまでに、社会的情報処理モデルをもとに育みたい資質・能力を整理し、学習環境や児童生徒の見取りを工夫することで、よりよい関係を築いていこうとする児童生徒も増えてきた。その一方で、さらに簡便かつ活用可能な児童生徒の実態把握の方法を模索していく必要がある。

【キーワード】 自己理解、他者理解、社会的情報処理モデル

1. はじめに

教育心理部では、児童生徒一人一人が集団の中で位置付き、集団に適応できるようになることを目指し、実践を重ねている。

子供も大人も、常に人との関わりの中で生活している。人間関係が円滑に進む場合もあれば、何かしらのトラブル（問題）に出くわすこともある。児童期では、むしろ後者の方が多いと感じる。中澤（1992）は、「子どもの社会的行動を理解するには、認知、行動、環境を総合的に捉える必要がある」と述べている。不適切な社会的行動が表出した結果、学校では様々なトラブル（問題）が起きる。トラブル（問題）は誰にも起こり得ると考えたとき、「自己や他者を理解する力」「解決方法を多様に思いつく力」「自己決定していく力」を養うことで、よりよい人間関係を築いていけるのではないかと考えている。

本実践では、これらの力を養う枠組みをモデル化した社会的情報処理モデルをもとに、自他の理解を深めながら、自らよりよい関係

を築いていこうとする児童生徒の育成の在り方について追究していくこととした。

2. 主題設定の理由

これまでの実践では、質問紙や日々の教師の見立てを基にして、学級活動を軸に「よりよい人間関係」について考えてきた。学習において、諸心理プログラムを活用したことで、自分が（仲間が）どう感じたか、どのようにすると、より自他ともに納得のいく関わりが生み出せるか、考えることができた。

一方で、人間関係を育む時間の広がりや発達段階に応じた支援、問題場面の捉え方について、疑問に感じることも少なくなかった。

そこで次の視点より、実践を見つめ直し、研究主題を設定することとした。

（1）今日の課題から

生徒指導提要（令和4年12月改訂）では、教育相談の目的に「児童生徒が将来において社会的な自己実現ができるような資質・能力・態度を形成するように働きかけること」と記

されている。そうした支援を行うにあたり、
①指導・援助の在り方は、教職員の価値観や信念ではなく、児童生徒理解（アセスメント）に基づいて考えること。

②柔軟な働きかけをしていくこと。

③時間的視点をもった指導・援助をすること。
が求められている。これまでの教育心理部での実践が、生徒指導提要で改めて「教育相談体制に臨む教師の姿」として、描かれている。

また「発達支持的教育相談」において、特別活動では「望ましい人間関係の形成」「協働的な問題解決能力の育成」などを目的とする活動、教科学習では「対人関係スキルや協働的な問題解決力を身に付けることのできる学び」と例示されている。

こうした点からも、アセスメントを基に、全教育活動における働きかけの在り方について、意図的な実践が求められている。

（２）目の前の子供の姿から

I 部（１～４年生）の児童は、他者に関わろうとする気持ちをもっている児童も多く、様々な場面で他者との共同活動を行おうとする児童が多い。しかし、関わり方が自己中心的になってしまい、互いの自己主張から他者の意見が受け止めきれず、トラブルになってしまうことも多くある。他者の細かい動きに気をとられ、瞬時に仲間の状況を考えられず、指摘が多くなってしまう。「他者の思いに気付くこと」の育成が、そうしたトラブルへの解決の第一歩であると考ええる。

（３）これまでの教育心理部の実践から

これまでの実践では、主題を「関係構築力を育む児童の育成」とし、子供たち一人一人の人間関係や諸スキルを「ステップ表」や「Hyper-QU」などの主観と客観の見立てからすり合わせを行い、実態把握を行ってきた。そのうえで、「心の時間」と題し、アサーション・トレーニングや、人間関係づくりといった活動を中心に、実践を進めてきた。それに

よって、各単位時間の学習活動の場では、よりよい人間関係のあり方やそれまでの自分の言動を想起し、その行為を振り返り改善していこうとする姿が増えていった。一方で、諸問題が起きる前に気付くことができない弱さや「他者を思いやる」と言いながらも行動につながりにくいといった課題も見られた。この要因の一つとして、学びが単発の場で終わってしまっていたことや扱う学習内容が児童にとって身近になっていないことが挙げられる。自己理解や他者理解といった対人関係スキルに関わる学習活動を特別活動の時間のみならず、教科の時間でも取り上げていくことで、より他者の思いに気付くことのできる児童、すなわちよりよい人間関係を育むことができるのではないかと考えた。

３．目指す姿と研究主題

仲間との関わりから他者の思いに気付けるようになるためには、他者の気持ちを理解したり考え方を知ろうとしたりする力が大切である。他者の思いを聞くだけでなく、自分の置かれている状況を把握することや自分の考えを表出することもまた、よりよい関係を築くためには不可欠なものである。こうした理解を社会的情報処理モデルの符号化、解釈の段階と捉え、この段階で「自己理解」「他者理解」「状況理解」をする力を育んでいく。この社会的情報処理モデルのサイクルを自ら回そうとする姿を教育心理部では「自走する姿」と捉え、そのような姿に迫っていける児童生徒の育成を目指している。

- ・ 日常場面において、他者の思いに気付いたり自分の思いを伝えたりして、自己や他者を理解しようとする姿。
- ・ 仲間との関わりから問題に気付く、解決するためにどうすればよいか考え、思いついた中で適切な方法を見出すことができる姿。

- ・ 問題解決のために見出した方法を実行したり、自分の言動を内省したりして、今後の生活でよりよい関係を築こうとする姿。

こうした姿を目指し、研究主題を次のように設定した。

仲間との関わりから、他者の思いに気づき、自らよりよい関係を築いていこうとする児童生徒の育成

4. 研究仮説

研究主題より、以下のように研究仮説を立てた。

- 9年間で育みたい資質・能力を明確にした指導計画に基づいて、児童生徒にとって必然性がある身近な問題場面を設定することで、他者を慮ろうとする意識を持ち、よりよい関係を築いていこうとすることができるだろう。
- 客観的データや教師の見取りに基づいた支援を充実させることで、児童生徒が自己理解を深め、他者の思いに気付けるような心情を育むことができるだろう。

5. 研究内容

(1) 研究内容 1

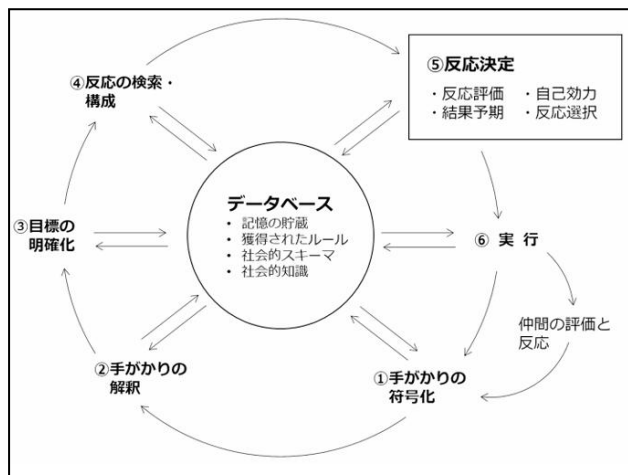
9年間で育みたい資質・能力を明確にした指導計画の工夫

本校は、義務教育学校である。そのため、9年間のカリキュラムの見通しをもち実践を進めていくことが、必要不可欠である。他者との関わりにおいて、日常生活でも自然に他者と関わることのできる児童生徒は多い。しかし、人間関係が固定化されてしまうことや一方的なつながりになってしまうこともある。そこで、多様な考えを交流する場を設け、他者の思いや考えを理解したり、共感したりする機会をもてば、「仲間との関わりから、他者の思いに気づき、協働的に問題を解決する力」が身に付いていくと考えた。9年間の出口で、

育みたい資質・能力を獲得しきることができるように、そこに向かうまでの発達段階を踏まえて社会的情報処理モデルをもとに9年間の指導計画や授業展開をデザインした。

① 社会的情報処理モデルを基にした資質・能力の整理

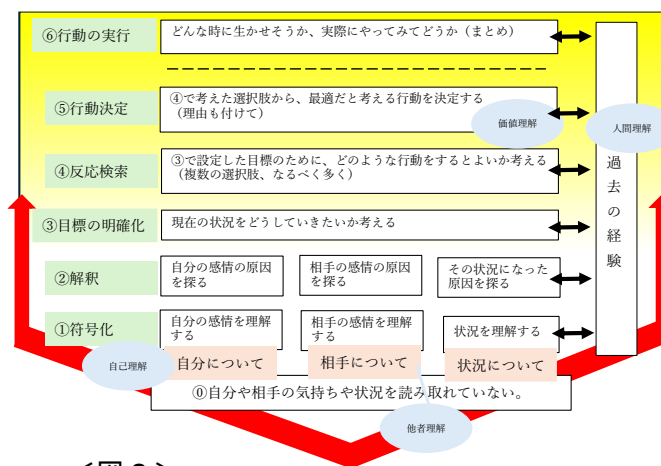
人と人が関わりながら生きていくために育みたい資質・能力を、社会的情報処理モデルをもとに図1、2に示す。



<図1> 社会的情報処理のサイクル

梅津 (2024) より

社会的情報処理モデルを学習場面に照らし合わせて考えたものを図2に示す。



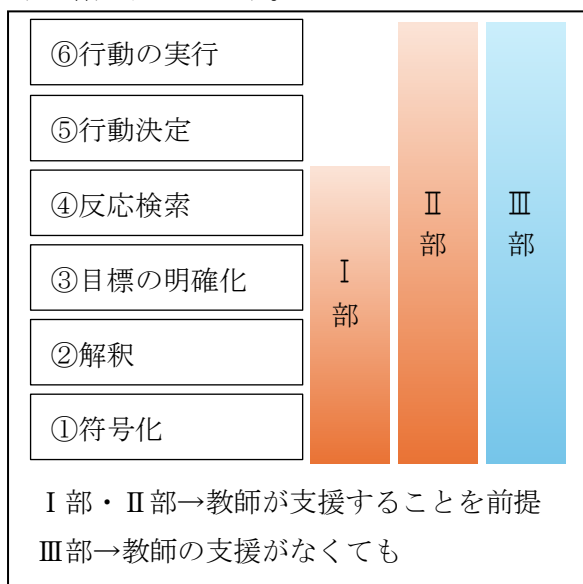
<図2>

社会的情報処理モデルと学習場面のつながり

図2のように、教育心理部では、自己理解、他者理解、状況理解を出発点として、各段階で行われる様々な理解や考えの表出ができる

力を発見力、各段階で発見力が発揮されて次の段階に進んでいき、児童生徒が自らこのサイクルを回すことができる姿を自走する姿と捉えた。

また、図1、2に示した育みたい資質・能力は発達段階を考慮する必要がある。本校は義務教育学校であり、1～4年生をⅠ部、5～7年生をⅡ部、8、9年生をⅢ部としている。そのため、Ⅰ部～Ⅲ部のそれぞれで目指す段階を図3に示す。



＜図3＞

各発達段階で目指す資質・能力の段階

② 育みたい資質・能力に合わせたSGE・SSTの位置付け

集団内における人間関係の形成を円滑にする実践として、SGE（構成的グループエンカウンター）やSST（ソーシャルスキルトレーニング）がある。これらは、自己理解や他者理解を促したり、社会性を育み、よりよい人間関係を構築したりすることに有効である。

また、日高・田村（2022）は、小学校の外国語活動においてSGEを実施することによって、自己理解、他者理解、親和性を向上させ、外国語活動の目標を達成させる実践を行っている。すなわち、SGEやSSTを実践することで、研究内容2-②にも関わり、教育心理部の

研究内容が他の教育活動にも活用されると言える。発達段階を考えると、低学年の段階ではスキルの獲得を目的としたSSTを中心に実施し、学年が上がるにつれてSGEの実施が主となっていく。SGEやSSTの実践は次の通りである。

SGE実践例：アドジャン

ペアでじゃんけんをして、指の合計の本数の質問をお互いに行う。時間内で多くの人と行うことで、他者理解、人間関係づくりが期待できる。

SST実践例：表情当てゲーム

表情カードを使い、カードに示されている表情から感情を想起し、当てるゲーム。他者理解、コミュニケーションスキルの練習が期待できる。

＜表情カード監修＞

包括的スクールカウンセリング研究会

（2）研究内容2

自他の理解を促す学習環境の工夫

① 課題を自分事として捉えられるような導入や問題場面の設定

日常生活で経験した場面を導入時に活用することで、児童が学習活動を自分事として捉えることができた。そのため、問題場面から事象の原因を探り、解決に向けた方法を見出そうとしていた。

1年生道徳科「がっこうたんけん」（感謝）の教材は、学校探検の場面を通じて1年生が2年生に感謝の気持ちをもつという内容である。しかし、本校の教育活動で、より深く1年生と2年生関わった活動は、生活科「はなをさかせよう」のあさがおの種まきであった。そのため、1年生が2年生に対して感謝の気持ちを想起しやすいように、導入で種まきの活動の様子の写真や2年生に活動時の気持ちを聞いたインタビューの動画を提示した（写真1）。この結果、児童は活動時の様子を

思い出してその時の気持ちを発言したり、2年生に対して感謝の気持ちを手紙で伝えたいという思いをもったりすることができた。

自分事として捉えることで、自己理解、他者理解が深まり、今後の日常生活につながる願いをもつことができおり、社会的情報処理モデルのサイクルと照らし合わせても有効な手立てだと考える。



＜写真1＞ 導入で提示した写真や動画

② 他の教育活動への広がり

社会的情報処理モデルをもとに考えた教育心理部で身に付けさせていきたい資質・能力は、特定の時間のみで育むものではなく、全教育活動で育むものと捉えている。また、教育相談の視点から授業づくりを行うことの重要性についても、生徒指導提要の中にも示されている。

そこで、様々な資質や能力の積極的な獲得を支援する「発達支持的教育相談」と教育心理部の社会的情報処理モデルの関連性を考慮し、様々な教育活動を実践した。

1年生図画工作科「いっぱい つかって なにしよう」では、たくさんの材料を使って造形遊びを行った。活動の開始時は、児童が各々の「これ作ってみたい」という願いから個人で主体的に活動する姿が多く見られたが、次第に仲間と作品をつなげようとしたり、協力して1つの作品を完成させようとしたりする姿が多くなった。仲間との関わりの中で「どのように並べたら友達と楽しくできるだろう」、「隣の子が作っている作品を壊さないように気を付けて動こう」と考え、活動を通して他者理解や状況理解の力が育まれた。



＜写真2＞

「いっぱい つかって なにしよう」の活動の様子

また、全校で人権について考える「ひびきあい週間」（人権教育）では、本校の人権宣言をもとに、「なかまのしあわせ」について考える学習活動を行った。1年生という発達段階を踏まえると抽象的な問いであったが、年度当初から社会的情報処理モデルをもとに考える活動を継続して行ったため、児童が多様な考えを生み出し、今後の生活に対する願いをもつことができた。社会的情報処理モデルをもとに実践を重ねることで、1年生という発達段階でも「目標の明確化」や「反応検索」の過程まで到達できたと言える。

（3）研究内容3

児童生徒一人一人の捉えや教師の見立ての工夫・吟味

① 客観的データの活用や内容の整理・修正、活用方法の改善

教育心理部では、研究内容1-①で示した資質・能力を把握するためのツールとして「ステップ表」を活用してきた。これらは、すべて担当教師による主観の見立てが主軸となっている。ここに、客観的データ「Hyper-QU」を実施し児童の実態を捉えることで、主観と客観の両面から児童の実態を把握してきた。

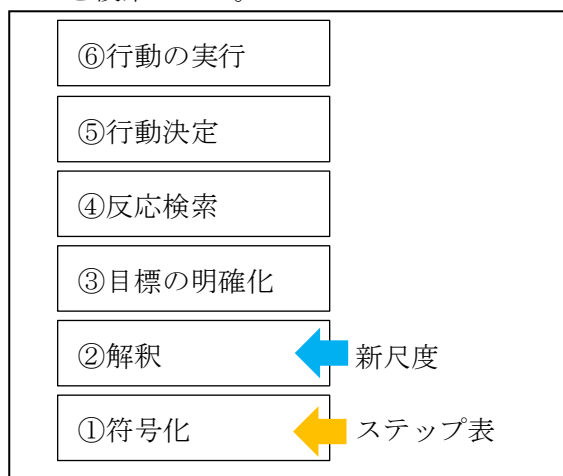
しかし、これまでの教育心理部の研究の課題として、より捉えやすく使いやすい見立ての方法を再考する必要があるという点が挙げられている。このような現状の要因は、「ステップ表」が膨大な項目数をもとに作成されており、持続可能な使用が現実的でないため

ある。

この現状を改善するため、見立てをする段階を変更することが有効であると考えた。現在の「ステップ表」は、自己理解、他者理解、状況理解を捉えるため、符号化の段階に焦点を当てていた。その結果、児童生徒を見取るための視点が多くなってしまっている。

久木山（2001）では、対人関係で起きた事象の原因を解釈する段階で、問題の所在を相手に帰属する「敵意帰属」、自分に帰属する「自責帰属」、相手でも自分でもなく偶然に帰属する「偶然帰属」の3つに類型化している。児童生徒を見取る段階を変えることで、児童生徒を3つに類型化することができ、膨大な項目数を精選することが期待できる。

今後は、これまでの教育心理部の研究成果である「ステップ表」を考慮しながら、新尺度を作成し持続可能な児童生徒の見取りの手立てを模索したい。



＜図4＞

ステップ表と新尺度の、見取りの段階の違い

6. 成果と課題

社会的情報処理モデルをもとに、児童生徒が様々な状況で、どのように感じ、考え、行動するかを捉えたことで、よりよい人間関係を築き、集団内で生活するために育みたい資質・能力を育成することができた。児童生徒の心情面の動きや発達段階を考慮した到達目

標を教師が把握することで、当該児童生徒がどの段階でつまづいているのか、どの資質・能力を育むとよいのかを捉えやすくなった。それにより、児童生徒に意図的かつ的確な指導・援助が期待でき、児童生徒は仲間と関わることを通して他者理解の力が育まれた。

一方で、児童生徒一人一人の見取りの方法は改善の余地がある。「ステップ表」や「Hyper-QU」を使うことで、詳細な実態の把握ができたが、持続可能な実践しやすさという点で課題が残る。研究内容3-①の通り、異なる段階で児童生徒の実態を把握することで、新たな方法を模索していく。

＜参考・引用文献＞

- ・ 文部科学省(2022) 「生徒指導提要」 東洋館出版社
- ・ 中央教育審議会教育課程企画特別部会論点整理 61 ページ 令和7年9月25日
- ・ 中澤潤(1992) 「社会的問題解決における情報処理過程と子どもの適応」 千葉大学教育学部研究紀要
- ・ 久木山健一(2001) 「大学生の社会的情報処理と友人関係適応の関連」 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要
- ・ 木村友里恵・吉澤寛之(2015) 「感情過程を導入した社会的情報処理測定法の開発-学校実施を想定した児童版測定法-」 岐阜大学教育学部研究報告人文科学
- ・ 日高則子・田村修一(2022) 「外国語活動における構成的グループエンカウンターの実践が児童の人間関係と学習目標達成に及ぼす効果」 協同と教育
- ・ 梅津直子(2024) 「中学生における関係性攻撃, 身体的攻撃と社会的情報処理特性および適応感との関連: 結果予期の歪みを中心に」 文教大学生生活科学研究

【公開3】1年2組 道徳科学習指導案

北舎1階 1年2組教室：吉田 侑矢

1 主題名・教材名

ものや おかねを たいせつに <A 節度、節制> 「うわばきぶくろ」

2 指導の立場

(1) 教材について

本教材の主たる内容項目は、「A 節度、節制」、関連性のある内容項目は、「B 感謝」である。うわばきぶくろの持ち主のはるおさんが、けんじさんとうわばきぶくろについて会話をする。その会話の中で、うわばきぶくろは、はるおさんのお母さんが忙しい中手作りしてくれたもので、幼稚園の時から使用しているものと分かる。

身の回りのものには、いろいろな人の思いがこもっていることに気付かせたい教材である。

(2) 児童について

本学級の児童は、「ものを大切にしなければならない」という社会通念上妥当かどうかを考えることができる児童は多い。一方で、頭で理解していても行動が伴わなかったり、自分ができていないことには目を向けず他者のことばかり気にしたりする児童も一定数いる。

そこで、多様な他者の考えを聞くことを通して、他者の考えを受容すること、本時の終末で、児童自身がこれからどのように生活したいか願いをもつことを目指したい。

(3) 指導について

児童の実態より、本時は社会的情報処理モデルの符号化と目標の明確化の段階に焦点を当てて指導を行う。符号化の段階では、自己理解、他者理解を促すために、導入時の提示資料の工夫と意見交流の場の設定を行う。また、役割演技の場を設定したり、「なぜそうしたのか」と問い返しをしたりすることで、自己理解、他者理解を深め、目標の明確化の段階で児童自身がこれからの生活に対する願いをもてるようにすることにつなげる。

3 研究に関わって

【研究内容1 9年間で育みたい資質・能力を明確にした指導計画の工夫】

社会的情報処理モデルをもとに本時の展開を組み立てることで、児童が各段階で育みたい資質・能力を獲得できると考える。導入から展開前半では、符号化を大切にし、自己理解、他者理解、状況理解に重点を置く。展開後半では、児童の対話から生まれる意見に問い返しを行い、物事の原因の解釈を深めることを大切にする。終末では、本時で考えたことをもとに目標の明確化を行い、日常生活につなげることを大切にする。また、本時では1年生という発達段階を考慮し、目標の明確化を単位時間の出口とする。

【研究内容2 自他の理解を促す学習環境の工夫】

道徳的場面を自分事として捉え、自己理解を深めることを促すために、導入で日常生活に関わる場面を提示する。本時は、ものの大切さについて考えるため、担任が4月から教室に落ちていた持ち主の分からないものを写真で提示する。また、多様な他者の考えを聞くことで、様々な視点から物事を考える力を身に付けたり、他者の考えを受容することができるようにしたりして、他者理解を深めることにつなげる。そのために、対話の場の設定を工夫し、多くの児童が意見を述べたり、他者の意見に耳を傾ける雰囲気を作ったりする。

【研究内容3 児童生徒一人一人の捉えや教師の見立ての工夫・吟味】

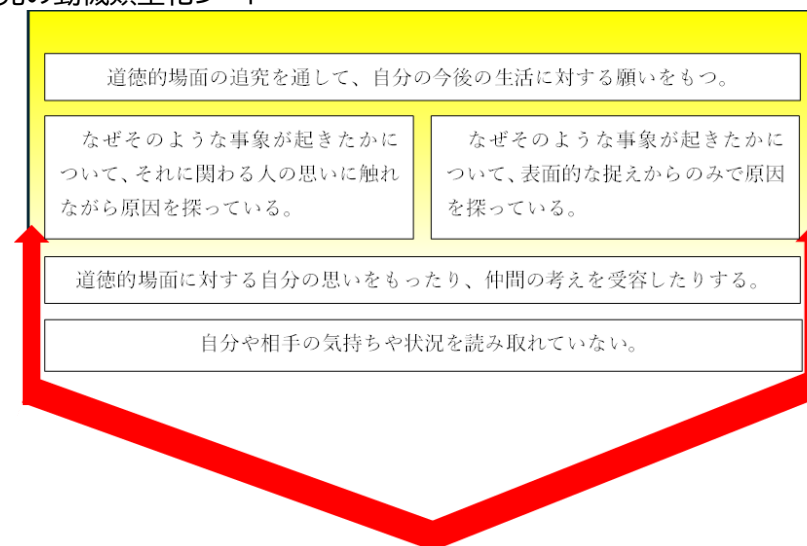
教育心理部では「自己理解」「他者理解」「状況理解」「状況理解・感情の知識理解」「行動に関わる能力」で児童の実態を把握するためのツールとして「ステップ表」を活用している。また心理検査「Hyper-QU」と合わせて他者理解に関わる個の支援、手段の支援を行っていく。ただし、1年生の現段階においては、発達段階を考慮し「Hyper-QU」は未実施である。

現在の本学級の児童は、ステップ表の5つ項目で、どの項目もステップⅠやステップⅡの段階にいる児童が大半を占めている。そのため、自己理解、他者理解、状況理解を満遍なく深めていくことを大切にする。

4 本時の、自走に必要な資質・能力「発見力」に関わって

表出する場面	授業の終末の場面
表出する行動	自分の考えを伝える姿

発見の動機類型化シート



5 本時のねらい

ものには、それをつくった人や買ってくれた人の心が込められていることに気付き、自分から進んでものやお金を大切にし、気持ちよく生活しようとする意欲と態度を育てる。＜A 節度、節制＞

6 本時の展開

学習活動	研究に関わって
1 教室にあった落とし物の写真から自分が感じることを考える。 この写真を見て、みんなはどう思うかな。 A 児：もったいないと思う。 B 児：落としすぎだと思う。ダメなこと。 2 教材を読み、考えを深める。★発見力の表出場面 このうわばきぶくろって、はるおさんにとってどんなものかな。 A 児：お母さんが作ってくれた大事な宝物。 C 児：幼稚園の時から長く使っているもの。 D 児：忙しいのに、時間をかけて作ってくれたもの。 「これがいいや。まだつかえるもの・・・。」の後に、どんなことを言いたかったのかな。 A 児：それに、これはお母さんがぼくのために作ってくれたうわばきぶくろだから、これからも使い続けたいよ。 E 児：今まで大事に使ってきたから、まだかえないよ。もったいないと思う。 F 児：思い出がいっぱいのうわばきぶくろだから、これからも大事に使いたいよ。だから、自分で洗うんだ。 この言葉が言えて、自分やこの言葉を聞いた人はどんな気持ちになったかな。 A 児：うれしい気持ちになった。 G 児：すごいなって思う。 3 児童が本時で追究した道徳的諸価値をもとに、今後の生き方について考える。★発見力の表出場面 もう一度、はじめに見た写真を見るよ。ここに写っているものは、誰がどんな思いで用意したのかな。 A 児：この鉛筆は、お母さんが、僕たちが頑張って勉強できるようにと思って買ってくれたと思う。それを、こうやって落としてしまうのは、ものを大事にしていけないし、お母さんの気持ちも大事にしていない。これからは、僕のことを思って準備してくれたものを、もっと大事にしたい。	1 【研究内容 2—①】 - 導入で普段過ごしている教室にあった落とし物の写真を提示することで、児童が本時の道徳的場面を自分事として捉えることができるようにする。 2 【研究内容 1—①】 - 児童が生活する中で様々な出来事が起きた時に、どう感じ、考え、行動するかを示した社会的情報処理モデルをもとに、はじめに自己理解、他者理解、状況理解を深め、続いて、気持ちや行動の裏にある原因を探り、最後に自身のこれからの目標を考えるとというプロセスを重視した発問や問い返しをする。 2・3 【★発見力の表出に関わって】 - 教育心理部として発見力を、「社会的情報処理モデルの各段階から次の段階に進むための力」と捉え、自己理解、他者理解を深めるために「なぜそうしたのか」問い返したり、役割演技の場を設定したりする。 3 【研究内容 1—①】 - 本時の終末で、導入で提示した写真を再度提示し児童の捉えの変容を明確にすることで、今後の生活に対する願いをもてるようにする。 【評価の視点】 日頃から使っているものにも様々な人の心が込められていることに気付き、それを大切にすることで気持ちよく生活しようとする意欲をもつ。